教育と文化

みんなで考えよう
人権・同和問題
No.254

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

●問合先　生涯学習課人権・同和教育係（☎㉓3186）

こころのバリアフリー

『バリアフリー』という言葉を聞くと、段差のない建物のことをイメージしがちですが、それだけではありません。バリアには『障壁』という意味があります。段差のように物理的なものもあれば、制度や文化、心理的な障壁もあります。このことを踏まえると『バリアフリー』の本質は、『生きづらさを取り除く』ことだと言えます。

かつて、バリアは『その人が抱える問題』とされていましたが、人権意識の高まりとともに『社会にある問題』という考え方に変わりました。社会は私たち一人一人で構成されているわけですから、取り除くべきバリアの根っこは、私たちの『こころ』の中に潜んでいることが見えてきます。この視点で考えると、私たちが意識を変えることで、生きづらさを感じる人を減らすことができるのではないでしょうか。

バリアフリーの一例として、『やさしい日本語』があります。阪神・淡路大震災で難しい日本語がバリアとなって、外国人に必要な情報が届かなかった反省から考え出されました。例えば、「ご覧ください→見てください」、「避難場所→逃げるところ」、「高台に避難する→高いところへ逃げる」のように、敬語の使用を控えたり、専門用語を日常的な言葉に言い換えたりすることで、外国人だけではなく、子どもや認知症の人など、すべての人に伝わりやすくなります。こころの壁を取り除くために大切なことは、相手の気持ちを自分に重ねて想像することなのです。

まずは、『自分を見つめる』ことから始めてみませんか。きっとそれが、『こころのバリアフリー』の第一歩になるはずです。

郷土の文化財

伊万里の遺構シリーズ～埋葬遺構を中心として～⑪

●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉒1262）

小島古墳の出土遺物（山代町久原　昭和47年調査）

小島古墳（前方後円墳・6世紀中頃）の出土遺物として、土師器と須恵器があります。この2種類の器は、古墳時代から奈良時代を中心に使われた器です。土師器は、弥生土器からの流れをくみ、約800度で焼成された赤褐色の素焼きの土器です。須恵器は、朝鮮半島から製作技術が伝わった新しい器で、まだ釉薬は使われていませんが、地下式の登窯によって約1100度で焼成されていて、器全体は青灰色の色調になります。土師器と須恵器は、古墳の石室内部に副葬品として置かれたり、埋葬時の墓前祭祀などに使用されたりしています。

小島古墳を発掘調査した時には、石室はすでに盗掘を受けていて、石室内からは、わずかな鉄器類や管玉などが出土しただけでした。墳丘上では、土師器片だけの集中域と須恵器片だけの集中域の2か所が確認されています。これらの器は、意図的に破砕され小片となっていました。このことから、墳丘上で祭祀が行われ、祭祀に使った器を別の用途に使われないように、破砕したと考えられています。

↑墳丘上で破砕されていた須恵器